
蒼神の軌跡「第三章の一步手前」：前編

肥後魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼神の軌跡「第三章の一步手前」：前編

【Nコード】

N9153N

【作者名】

肥後魚

【あらすじ】

蒼神の軌跡：第三章に繋がる短編の前半。

少年、片峠次真は時間にして五年間程の修行の旅の最後の地で剣術の修行に励んでいた。そんな折、道場の当主の孫、北郷一刀と試合をすることになり・・・

一刀は魏の後の姿です。

（前書き）

次真が強くなる途上の位置です。この世界では魔法は基本使いません。

この頃、次真は一人で異世界を巡る修行の旅に出ていた。そこで様々な戦闘技術…、拳法、剣術、射撃、特殊能力…。瞬く間に習得し、極めていった。

…これは、そんな彼がとある世界にて剣を極めていた頃のちょっとした話。

次真 Side

第095世界：日本国・九州某所

「せいっ！ やあっ！」

次真は素振りを繰り返している。だが、手に握られているのは竹刀でも木刀でもない。それらとほぼ同じ長さをした木の棒である。彼が行っているのは日本の剣術の一つ、「示現流」の稽古。この流派では木刀などは使わず、こうして木の棒を振って鍛えるのだ。元々、示現流は上段からの初太刀で相手を絶命させる一撃必殺的なもの。つまり、受け太刀などの細かい技術はいらない。必要なのは、振りの鋭さと重さ…。更にいえば、

「せいやああああ！！！！（バゴオオオン！！！！）」

他の流派を学んでいても、示現流のこの練習を取り入れれば上段か

らの斬撃が破壊力を増すことができるのだ。ちなみに、次真は今の一撃で直径5mほどの岩を吹っ飛ばした。木の棒は彼の「気」を纏わせているため、折れたりはいない。

「はっはっは、精が出るのお。」

「おっ、爺さんじゃん。珍しいね、ここに来るなんて。」

次真が爺さんと呼んだ70歳程の老人は「北郷当主」という人である。下の名前はあらしいが、何故か皆知らないらしい。次真もあえて聞かずにいた。

「それにしても、お主は筋がいいもんじゃ。もう、『免許皆伝』を授けるころかもなあ……。」

いっておかなかったが、彼こそはこの辺り一帯では「示現流の天才」と呼ばれ、全国に名をとどろかす「北郷道場」の頂点に立つ男なのだ。無論、老人となっても剣の腕は衰えずにその風格は健在だった。

「いや、まだまだだよ。もう少し、ここで修行させてもらうさ。」

「はっはっはっ！ お主ほど修行を熱心にする若い連中は見たことが無いわい。まったくわしの孫にも見習って欲しいものじゃ。」

「孫？ 爺さん孫いるの？」

「うむ、おる。名を一刀^{カスト}といってな。今は東京の『聖フランチェス力学園』なるものに通っておる。たまにここに来て剣道を教えてやるのじゃが、どうもやる気が見えんのじゃ。というよりも、強くなるうっという意志が見当たらん……。お主とは正反对じゃのう。」

次真は珍しく北郷当主が弱気で話すことに少し驚いているが、仕方ないとも思った。なにせ、この世界の日本は戦争など皆無なのだ。強さを求める理由が無い。・・・まあ、恋人が出来たりすれば別だろうが・・・。

「まあ、気長に待ってやればいいんじゃない？ 爺さんに限ってすぐにあの世に行くわけでもないし。」

「縁起でもないことをいいおる。当たり前じゃ、こんなところでは死なんよ。」

「ははは、その意気だよ。まっ、俺がやる気満々なのはこの世界が最後の修行の場だからなのが大きいのよ。」

そう、彼はようやくもとの世界に帰るのだ。一年ほどではあったが、世界によつては時間の流れ方が違ったりするので実質は5年ほどの月日を過ごしたように感じる。

「ほほう、お主の旅も遂に終盤というわけじゃな。なるほど、やる気の出所はようわかった。まあお主は基礎と活用は既に完璧だからな。後は秘技の習得くらいじゃろう。」

「『杉崩し』か・・・。OK、やってみるよ。」

「はっはっはっ、期待しておるぞ！」

そういつて北郷当主は道場へと戻って行った。

「さて、『杉崩し』の練習でもするかな。」

次真も、秘技の練習を始めるのであった。

5日後：北郷道場

次真は他の門下生らと撃ち合っていた。北郷道場では、示現流のほかにも普通の竹刀を使った剣道も教えている。ちなみに、今日は練習試合。ランダム勝ち抜け戦だったのだが・・・。

「せいっ！！（バシユツ！！！！）」

「あだっ！！！！」

「胴あり、一本！ 勝者、片峠！！」

『おおー！！（パチパチパチパチ）』

次真は圧倒的な強さで勝ち残っていた。彼は他の世界でも剣術修行を経験し、しかも三歳の時から両親に教わっていたのだ。（指導は相当甘かったが・・・）いかにこの道場で強かろうと、まだ弱冠14歳でも物凄い才能のある彼に勝てるものはいないのだ。

「次真、やっぱり強いなあ」

先ほど次真が胴で一本勝ちしたのは、ここの塾頭；大隈義久。彼もまだ19歳と若い。

「いやいやあ、義久兄さんもやつぱり隙がないなあ。おかげで苦勞させられたよ。」

次真はこの義久と非常に仲がいい。彼の剣は次真には少し及ばないが、透きとおっていて非常に綺麗なのだ。次真は尊敬の意も込めて彼を『義久兄さん』と呼んでいる。

「ははは、でも結局は隙を見つけられて撃たれたけどな。」

「え、いや、その・・・」

「ははは、気にするな。負けは認めてるよ。」

そういつて、彼は次真の頭を撫でながら一緒に道場の端へと戻った。そして、彼と次真はそこで同年代の門下生とがやがや話し始めた。元々から人のいい次真である。五ヶ月前にここに来てからも、すぐに皆とも仲良くなったのだ。また、何よりも彼の才能は何故か他人に悪印象を与えない。逆に惹かれるようなものだ。

「これこれ、まだ試合は残つとるぞ。あんまり騒ぐでない。」

北郷当主からちよつと注意を受け、彼等は姿勢を正しながらも疑問に思う。特別指南の次真と塾頭の義久が最後まで勝ち残っていたので試合は最後だったはず。まさか、当主が直々に次真とやるのではないかと緊張が走るが、当主は何故か次真を控え室に呼んだ。

「なんだい爺さん？　なんか不満でもあった？」

「いやのう。お主、先日の話を覚えているか？」

「孫の話のこと？　確か・・・、名前は一刀だっけ？　そいつがどうかした？」

「うむ・・・。実は三日前に息子の奥さんから電話があつてのう。一刀がたった一日で、別に雨が降ったわけでも喧嘩したわけでもないのに制服をボロボロにして帰ってきたらしいのじゃ。しかも、『俺は三国志のキャラが全員女の子の世界にいた』とか、『彼女と共に覇道を突き進んだんだ！』なんて言つておつたらしい。」

「三国志の世界！？　しかも全員女の子！！？」

「うむ・・・。お主、心当たりはないか？　お主も異世界の住人。何か知つておるのではないかと思つてのう・・・。」

「まあ・・・、確かに世界は膨大な数があるからな。そんな世界があつてもおかしくはないけど、どうやってその世界行つたのかが分からないなあ・・・。」

「むむむ、そうか・・・。いきなりすまなんだ。それでもわしも祖父、心配でう。」

「いいよいいよ、こつちこそ力になれないでゴメンな・・・まあ、話の経緯はなんか読めてきたよ。その一刀って奴、ここにいるんですよ？」

「ほほう、そこまでお見通しか。うむ、そうなんじゃ。しかもじゃ、いままであれほど渋っていた剣道を本格的にやりたいなどと言ってきた。おつた。」

「そりゃあよかつたじゃん！　これで懸念が無くなつたろ？」

「そうなんじゃが……。あやつ、ここの門下生と試合をしたいとぬかしたのじゃ。」

「いきなり試合！？　そりゃあ無謀だろ、ここの門下生はみんな一流揃いだ。そんないい加減に剣道を少し齧つてた奴が勝てるはずが無い。」

「そう、そうなんじゃ……。じゃがのう、わしは今たまげている。」

「ん？　どうしたんだ？」

「ここのほかに、山の麓の別館で残りの半分の門下生が同じく練習試合を行つておるのは知ってるな。」

「ああ、今朝早くの連絡事項の時に聞いたよ。」

「別館は23歳以上の大人のみがいつも稽古をしておる。正直言つて、経験がある分あの者達は本館の若い門下生よりも実力はほんの少し上じゃ。特に、一刀の年上の従兄弟である北郷鬼吉はお主には及ばんが、大隈に匹敵する強者じゃ。」

「へえ。そんなに強いなら、今度試合したいなあ。」

「うむ。鬼吉もお主の話を聞いて同じことを言っておった。が、当分無理じゃ。」

「!？　なんかあったのか？」

「今日の試合で強烈な面打ちを食らって脳震盪を起こしてのう。一週間は安静じゃと。」

「な!？　だってその人は別館では一番強いんだろ？　それがなんで・・・？」

「一刀じゃ。」

「へっ？」

「一刀に完敗したんじゃ。鬼吉だけではない、別館の門下生は全員一刀に圧倒されて敗北した。」

「なっ!？」

「それは本当ですか師匠!？」

恐らくちよつと前から盗み聞きしていた義久が、入ってくるなり驚きの声を上げた。

「うむ、真実じゃ。そしてぬかしおった。・・・『本館の門下生に

も負けないよ。というよりも、いくら爺ちゃんが育てた門下生でも今の俺には勝てない。』と……。」

「（ドンッ）舐めやがって（怒）！！！！！」

義久は当然怒った。なにせこれは間接的には当主を侮辱したことで同じなのだ。それに、自分の腕を見下されたともいえる。

「まあまあ落ち着こう。」

「むう……。けどよ次真、お前も馬鹿にされてんだぜ。腹立たないのか。」

「もちろん立ってるさ。爺さん、つまり俺達は一刀と試合をすればいいんだな。」

「おっ！！　なんだそういうことか。」

「うむ、そういうことじゃ。まあ一刀も悪気は無いようじゃ。本当に己の力を信じているらしい。まあ、鬼吉よりも腕の立つお主らはより上かは分らんがの。」

「ええ、その鼻っ柱をへし折ってやりますよ。」

「うむむ……。じゃが、わしはちと恐ろしさを感じるのじゃよ、一刀の剣に……。」

「まさか……。殺気があるとか……？」

「その通りなんじゃ……。あれは倒すための剣というより、殺すための剣に見えて仕方ないのじゃ。次真、義久、お主らのようにな。」

「マジで？」

「なるほど……。」

ちなみに、次真が幾多もの命を奪ってきたことについては道場のみんなが知っている。が、ほとんどが半信半疑で実際に理解しているのは当主と義久、そして会った事はないが鬼吉だけである。また、義久も過去に仕方の無い事情で人を斬ったことがあるのでその様子は経験している。

「じゃが、お主らは切り替えというものが出来る。特に次真、お主はそれが完璧に出来ている。だからこそ、秘技を伝授しようとしておるのじゃ。」

「でも確か、義久兄さんは既に『杉崩し』を習得したと聞いているけど。」

「ああ、もう使えるよ。」

そう。義久が次真よりも勝っているところ秘技『杉崩し』を習得している点なのだ。

「マジ！？　なら今度立ち会ったときに見せてよー！」

「そうだな。今度見せてやるよ。」

「やった〜!!」

「おっほん。」

「「あっ・・・（ササッ）」」

「でだ。今日にでもお主らに立ち合ってもらいたかったのじゃが、ちと話が長引きすぎたのう。では明日の午後にしよう。」

「了解」

「わかりました。で、順番はどうします？」

「そりゃ俺が最初でしょ？ 年下なんだから。」

「いや、俺が先がいいよ。」

「え！？ なんで？」

「お前のほうが強いからだよ。おっと、それは紛れも無い事実だから言い訳は無しな。」

「むう」

「それに、正直言ってお前の手を煩わせるに値しないと思うからさ。まあ相手が元気なうちに試合をしたいってのもあるけど。」

「はあああ、わかったよ・・・。爺さん、義久兄さんが先でいい？」

「うむ、依存は無いぞ。では今日はもう下がってよいぞ。道場で退屈してる他の者にも言っといてくれ。それと、明日の稽古は一日を通して休みじゃ。」

「はいはい」

「わかりました。」

「ではのう」

「「お休みなさい。」」

そうして、当主は道場の隣にある母屋に帰っていった。次真と義久は道場へと戻り、今の話を門下生達に聞かせた。

「ふざけんな!!」

「こつちを馬鹿にしてるのかよ!!」

「全く持つて腹が立つな!!」

案の定、全員がお怒りとなった。

「みんな落ち着こうぜ。今騒いだって始まらないだろ。」

「そうだぞ。まっ、明日の試合で俺等がフルボッコにしてやるから安心しな。」

「応!! 頼んだぜ次真に塾頭!!!」

「一刀って奴の自惚れを叩きのめしてくれ!!!」

彼等はワーワーと囂し立て、二人も断然気合が入った。といっても、義久が負けなければ次真に出番は無いのだが……。そして、家が近いものはそのまま帰宅し、遠いものは道場の向かい側の宿舎に戻っていった。

その時、次真と義久以外は気づかなかった。道場の外からこちらを覗く、不審な影に……。

「……負けない……。俺は、向こうに帰るまで、負けられない・・。」

青年は、そう呟いた……。

その夜・宿舎休憩室

「ふう、さっぱりしたあ」

次真は一日の疲れを癒すために少し遅めの風呂に入り、たった今上がって休憩室に来了。既に数人の先客がいて、テレビで野球観戦、オセロ、卓球などを楽しんでいた。

「おつ、上がったか次真。一緒に卓球どうだ？」

「やるやる」

次真と同じ年の重富^{シゲトミナリアキ}昭らに誘われ、次真は迷わず参加した。

カッ

コッ

カッ

コッ

風呂上りにそんなに汗はかきたくないの、基本的にはラリーのみである。一見つまらなそうではあるが、これが意外と楽しかったりする。

「なあ次真。」

「ん？　なんだ？」

齊昭はラリーを続けながら話し始めた。

「・・・お前ってさあ、本当に人を殺したことあんの？」

「・・・。ああ、あるよ。それも、何千万人と、ね・・・。」

空気が一瞬で重くなるが、ラリーは止まらない。

「その殺した奴等って・・・、やっぱり悪人なのか？」

「それがほとんどだな。ただ、証拠隠滅という名義で罪の無い人を殺めたことはある。」

「・・・そうか・・・。」

カッ

コッ

カッ

コッ・・・

齊昭は黙ってしまった。が、ラリーは続く。

「・・・人を殺すつて、どんなもんなの？」

隣で話を聞いていた、これまた同級生の土肥和那ドイカズナが聞いてくる。

「最初は酷いもんだよ。相手が死んだつて分かった瞬間、吐いちまう・・・。」

「じゃあ、慣れたらどうなの？」

「・・・。何にも感じなくなる。そう、負い目も、後悔も・・・。」

「・・・。。。」

「・・・。」

和那も黙ってしまった。・・・いつの間にか、ラリーの相手は斉昭から2つ年上の海江田末男カイエダスエオに替わっていた。元々からあまり口数は多くないとはいえ、彼もまた口を閉ざしている

「怖いか・・・？ それとも、気持ち悪いか、俺が・・・？」

次真は自嘲気味に苦笑しながら言った。

「まっ、それが当たり前さ。」

ケロリと続ける。・・・なにせ、次真は慣れている。嫌われることも、怖がられることも・・・。

「なら、俺達は異常だな」

「!?!」

齊昭が口を開いた。

「そうね。私たちが変わり者らしいわね。」

和那もそう言っと、次真に歩み寄り、

「てか、いつ誰が次真を嫌ってると思ってんのぉ?（ガシッ! ムギユウウウウウウ!）」

「!?!? なっ! いひゃい、いひゃいよかふな!」

和那は次真の頬を思いつきりつねりはじめた。

「あんたは思いこみが激しいのよ。もう少し回りを信用しなさい。」

「むう、ひよ、ひょうか？」

「そうだ。俺達はそれを承知の上でお前を友人と思ってる。それを忘れるな。」

「お前は好き好んで殺したんじゃないんだろ？　なら何で嫌う必要があるんだよ。」

3人は怒りつつ、でも優しく言った。

「だから、安心して。あんたはあたし達の友達だよ。」

「・・・、（・・・うるうる）」

「な！？　なんで涙流してんのよ！！！」

「！？　だ、誰が涙なんかっ！！！！！」

「自覚無し、か。」

「まあ、事実を受け止めとけ。」

「だから泣いてなんかいないぞっ！！！！！！！」

「「はははは（笑）」」

「笑うな　　！！！！！！！」

4人はいつもの調子を取り戻した。その後、結局卓球の真剣勝負をして汗をかいたため、もう一度風呂に入る羽目になってしまったのはご愛嬌。

そして、二回目の入浴後、

「というわけで、明日はがんばれよー!」

「ボツコボコにやってね!」

「・・・期待している。」

「あのさぁ・・・、俺がやるってことは、義久兄さんが負けるってことだけど・・・。」

「・・・ま、まあ、一応気合だけは入れとけよ。万が一ってこともあるし。」

「そうそう。意外にコロって負けちゃうかもよ、義久さん。」

「・・・試合は分からんからな。だから準備はしててもいいんじゃない、あつ・・・。」

「??? どうしたの海江田さん? 何か後ろにい・・・あつ・・・。」

「ん? 後ろがどうかし・・・あつ・・・。」

「なんだよ（笑）、まさか塾頭が後ろにいるわけじゃあるまいし」

「イルヨ」

「へ？ あっ……。」

いつからいたのか、そこには義久が立っていた。手には、竹刀がある。。。

「ア、アノ……。ドウカシマシタカ？」

「ダレガ、コロツテマケルツテ？」

「！！！！！イ、イヤアレハ……。」

「チョットシタジョウダンダヨ……」

「フーン、ソウナンド。」

義久はそついうと、竹刀を構えた。

「ナラ……。これも冗談だよなああああああ！！！！！！！！！！」

竹刀が振り下ろされ、

「（スパアアアン！！！！）あゝおっ！！！！！」

末男にhitし、彼は気絶した。

「「「ひ、ひひひひひひ！！！！！！（ブルブルブル）」「」」

「ちょっとしたお仕置き。でもすぐに済む。」

そういつて、義久は再び竹刀を構えなおす

「い、いやああああ！！！！！！！！！」

「勘弁してええええええ！！！！！！！！！」

「てか、何で俺も！？ 俺関係ないよおおおお！！！！！！！」

ほぼ無関係の次真の必死の訴えに、義久は少し考えてから、

「うん・・・、ついでに受けとこうか」

「理不尽だああああああ！！！！！！！！！」

「言い訳無用、ならいくぞ」

「「ぎゃあああああああ………!!!!」」

スパパアアアン!!!!!!

3人は気絶した。

一刀Side

同刻：母屋客室

「二人は承知したぞ、一刀……。」

当主の言葉に、青年……北郷一刀は無言で頷いた。

「にしても、半年前とは別人じゃのう。この前一体何があったのかは知らんが、身にまとう雰囲気が変わつとる。」

「……………」

一刀は無言のままである。

「お主、殺す気じゃったろ……?」

「……………」

「殺気が満ち溢れておった……。ほとんどの者がお前と対峙した時点で気圧されておったわい。唯一、鬼吉だけは平気な顔をしておったが、打ち合ってみればお主の圧勝……。正直、開いた口が塞がらんかった。」

「……………」

「わしが育てた門下生でも、今の自分には勝てんと言ったな……。聞いた直後は腹が立ったが、今はあながち間違っておらんと思うようになった。」

「……………」

「じゃが、やはり甘いのお……。」

「!?!?…どういこと、爺ちゃん……?」

今まで黙りっぱなしだった一刀がようやく口を開いた。

「明日のお主の相手である大隈義久と片峠次真……、あの二人は桁違いじゃ。義久は、ここ10年では唯一この道場に伝わりし秘技

オオスミヨシヒサ カタトウゲツグマ

『杉崩し』を会得しておる。あれを使われれば、おぬしも危なかるう……。」

「……なら、それを使わせなければいい。杉崩しは瞬間的に出せる技じゃないでしょ？……なら、相手が全力になる前に決してしまえばいい。」

「うむ、まあその通りじゃな。じゃが、そう簡単にいくかは知らないが。それに、その後に次真も残つとるぞ。」

「問題ないよ……。まだ14歳だろ？　いくら腕が立つといつても、まだガキだよ。正直いて、眼中にないよ。・俺が体験してきたのは、そんな甘い世界じゃなかった。そして、あいつらが使う剣なんて、【彼女達】と比べれば『遊戯』だよ。」

一刀は淡々と話す。それを聞いた当主は、少し顔を歪ませた。

「……一刀。お主、わしの指導を馬鹿にしておる節は見当たりそうな口調だのう……。まあそれはいいとして、やはりおぬしは勝てんな。」

「なっ！？　どういうことだよ爺ちゃん！！！！！」

淡泊だった一刀が豹変し、当主につかみ寄る。その形相は半端ではない。

「言った通りじゃ。義久は分からんとして、お主では絶対に次真には勝てん。」

「・・・理由は？」

ひとまず冷静さを取り戻した一刀は、尋ねた。

「お主が行ってきたという世界・・・。確か、『三国志の登場人物が全員女の子』というところだったかのう。一刀よ・・・、そこは世が乱れていたか？」

「ああ、物凄く。」

「戦はあったか？」

「頻繁に。」

「人は死んだか？」

「数え切れないほど・・・。」

「じゃが、その中に希望はあったか？」

「あった。俺は、その希望の人に拾われた。」

「その希望と共に、何をした？」

「覇道を突き進んだ・・・。そして、大陸を平定して三国で治めるシステムを作り上げた。」

「愛は・・・、あったか？」

「希望の・・・、魏のみんなと愛し合った・・・。」

「お主は、守ったか？ それとも、守られたか？」

「守られた時はっかりだった・・・。」

「そう、か・・・。その者らに、鍛えられたか？」

「みつちりね。だから、強くなれた。2日前、今まで遠く及ばなかった剣道部の先輩に、圧勝した。」

「その時、思ったのじゃな。」

「ああ・・・俺はまだまだ彼女達には全く届いていないけど、《強くなった》・・・。」

「うむ、それは事実じゃ。」

「だから、俺は明日も負けない。いや、負けるわけにはい「一刀よ。・・・何、爺ちゃん？」

当主は一刀が話していた途中で割り込んだ。その顔は、無表情だが、確信めいたものだった。

「確かに、お主はその世界で自身を身体的に、精神的に強くしたよ
うじゃな。」

「ああ。自慢できるほどじゃないけど、何かが変わったよ。」

「ふむ……。じゃがの、一刀。お主は一つ勘違いしてある。」

「????」

「お主がしてきた体験、『それはこの世でお主のみにあつたことでも思っておるのか?』」

「!?!?」

「『お主以外にも、そのようなことを体験してきた者はおらんとでも思っておるのか?』」

「!?!?」

「そう思っておるのならば、勘違いも甚だしいぞ。」

「……。」

一刀は言う言葉がなかった。そんな彼を尻目に当主は部屋を出て行くとしたが、ふと立ち止まった。

「聞き忘れておった。お主、あちらの世界で人を殺したか?」

「・・ああ、殺したよ。爺ちゃん、俺が別の世界に行ったなんて言つて、よく疑わないね。」

「まあ。なにせ、既にこの道場には異世界からの客が着ておるか

らの。だから、ここの者はお主のような話は慣れておる。」

「片峠次真、だろ？」

「うむ。わしもあやつから異世界について詳しく聞いたからこそ、お主の話を疑わんのじゃ。」

「・・・話を戻すけど、なんで俺はあいつに勝てないの？」

「経験と努力、そして天性の才能じゃ。」

「経験と努力？」

「あやつは格が違う。お主のように無理やり他の世界に飛ばされるのではなく、自由に世界間を行き来して己を鍛えておるのじゃ。なればこそ、弱冠14歳ながらこの道場で経験豊富に稽古を積んだ義久らの上をいつておるのじゃ。」

「そ、そんなことが出来るのかよ・・・。」

「出来るからこそ、やっておるのじゃ。それと、あやつには計り知れない天性の才能がある。」

「天性の才能？　つまりは物凄い天才って訳？」

「そうじゃ。じゃがあのタイプの才能というのは、普通に生きているは開花することはない。」

「要は、普通じゃない鍛錬が必要ってこと？」

「うむ。しかも、眠っている才能が大きければ大きいほど鍛錬を要する。・・・そして、それを乗り切ったあと、目覚めた才能は・・・」

「目覚めた才能は・・・？」

「・・・言葉に出来んほどの成長を遂げて行くのじゃ。現に、今の次真はどんどん才能を開花させておる。」

「・・・だから、勝てない？」

「そうじゃ。それに・・・、」

「ん？」

「あやつは、何億という生ける者らを『葬って』きておる。」

「！？ 殺したってこと？」

「うむ。じゃから、お主は次真には勝てんよ。まあ、明日は『杉崩し』の破り方でも学べば「爺ちゃん。」「・・・なんじゃ？」

「一刀は、ゆらりと立ち上がって言った。

「才能なんて、関係ない。長さなんて、意味ない。」

「なんじゃと・・・？」

「意味があるのは、『覚悟』の確証、だ。」

「な・・・なんと・・・！」

「ナポレオンが言ったんだってね。『私の辞書に不可能という文字はない』って・・・。あれ、俺の辞書も同じだから。」

「な、な・・・。」

「誓ったんだ、俺・・・。」

一刀は、告げた・・・。

「必ずあつちに戻る。そして、それまで俺は、『負けない』！」

「！！！！！！」

当主は啞然とするしかなかった。啞然としながらも、少し疑った。

『目の前にいるのは、本当に自分が知っている【孫】だろうか』、

と・・・。

次真Side

翌日・午前：道場本館

次真と義久は、いつもよりも少し遅めに目が覚めた。その後、今日は午後まで時間があることもあって比較的ゆつくりと身支度を済ませた。そして、今は別々に最後の調整をしている。次真は斉昭との立ち合い、義久は素振りだ。

「せいっ！！！（ブオンッ）」

「うおっ！？（ガキンッ）　ぬう・・・、面っ！！（ビュンッ）」

「〔ニヤリ〕やあっ！！（ドッ）」

「うっ！！？（ドスッ）」

「突きあり、一本。次真の勝ちね。」

和那の声で、次真の勝ちが決まった。

「はあああ・・・、今日は一段と動きがいいな」

「そうか？ お前も中々だったぞ」

「ははは、言いやがって」

一つ言い忘れたが、斉昭は13歳の時に「全日本中学剣道大会・男子」で優勝経験があるのだ。なので、この道場でも結構強いほうだったりする。

「ふむふむ、次真は絶好調だな。」

義久も素振りを中断し、感心している。

「そういう義久兄さんも、今日は一段と剣が鋭いね。素振り見てて分かるよ。」

「ん？そうか。なら、今日のお前の出番はなさそうだったりする？」

「うするする」

「よっしゃあゝ、頑張るぞー！」

「「「おーー！！！！」」」

「おゝい、お取り込み中悪いんだが、ちょっといいか？」

4人が意気込んでいる時、後ろから声が掛かった。

「あれ？ 鬼吉さんじゃん。」

「え！？ この人が北郷鬼吉？」

「いかにもそうだけど？ 君が片峠次真かい？」

「ええ、そうです。」

坊主でグレー一色の胴着を着ている20代前半のちよつと怖いかんの男、これが北郷鬼吉である。

「へえ、やっぱり纏うオーラがいいなあ。そうだ！ 今度立ち合って下さいよ。」

「おう。それはこちらこそ是非ともお願いしたいな。いやあ、本当にまだ幼さが残ってるのになあ……。」

互いに褒め合って試合の約束をするあたり、相性はよさそうである。

「まあ、立ち合いはまた今度な。あと何日かは絶対安静だからさ、素振りでさえ禁止されてんだ。」

「あ……、これは失敬。」

「気にしないでくれ。俺の力不足が招いた結果だ。」

そう言いながらも、鬼吉の表情は少し曇っている。

「北郷一刀、ですか・・・。」

「ああ」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」

5人は黙り込む。北郷道場きつての使い手、鬼吉を圧倒した一刀の実力……。その根本的なものが何かは、未だに分からないのだ。否……、

「理由はあれど、信じられない、か……。」

三国志の人物が全員女の子の世界で乱世を平定して鍛えられました、なんて話をいきなりされても、勿論信じられない……。

次真を除いては、だが……。

「貴方がここにきた理由、まあ察しはつきます。」

「一刀との試合の経過を話に来てくれたんですね？」

「そう気づいてくれているのなら助かるよ。」

いかに圧倒されたとはいえ、試合をしたという点については全く変わらない。現に次真達は、今の調整が終わったら鬼吉に話を聞きに行こうと思っていたのだ。

「で、実際のところはどんなんですか？」

「ああ……。正直言って、こちらの攻撃が全て見透かされていた。」

「何……。！？」

「マジかよ……。」

義久は驚愕を露にし、次真は面倒なことだと言わんばかりに呟いた。

「それと、こっちの方が重要だろうな。」

「攻撃面のことですか？」

「そう。正直言って……。」

鬼吉はそう言いかけると、少し間をおいてから言った。

「……。それこそ、人を殺せるような速さ・重さ・鋭さを備えている。」

『っ！！！？』

人を殺せるようなくらいのその三要素のレベルの高さ……。尋常ではないことがよく分かる。

「なるほど・・・、鬼吉さんが気絶したのがよく分かります。」

義久は鬼吉の強さをよく知っている。なので、彼が気絶するほどの一撃の凄まじさはすぐに理解できた。

「・・・教えていただけませんか？ あいつの癖とかを・・・。」

次真は、静かにそう言った。

一刀Side

昼前：屋外稽古場

あと二時間もすれば、ここで一刀と義久の試合が始まる。そして、結果によつては次真も試合をすることになる・・・。

「ふんっ！ ふんっ！！」

一刀は一人で黙々と竹刀を振り続けていた。その振りの鋭さは、常識を超えたものがある・・・。

しかし、彼は納得しない。こんな振りより、もっと凄いものを見た

ことがあるのだから。

「はぁ……。やっぱり、竹刀じゃ物足りないな。なにせ向こうでは刃を潰した本物の剣で鍛錬してたからなあ……。」

この世界ではありえない話である。そんなことをしたら、銃刀法違反で御用だ。

「……。やっぱり、この世界は甘い。なんか、居心地も悪いしなあ……。」

「それは向こうが居心地が良過ぎたんじゃないのか？」

「!!!? 誰だ!!!」

突然背後から声が掛かった。叫んでみれば、叢から中二くらいの少年が出てきた。金髪のウイングショットに蒼と緑のオッドアイという、外国人みたいな容姿だ。

「突然すいませんね。」

「全くだよ。で、君は誰だい？」

「俺は片峠次真。ここで五ヶ月前から示現流を中心に剣を磨いてる。」

「なっ!?!? 君が片峠次真なの!!!?」

「うつ、心外だな。まだほんのガキじゃねえかなんて思ったんでしょ？」

「い、いやあそんなことないよ・・・（凶星）。」

「まっ、いいんだけどね。」

次真はそう言うと、一刀の目をしっかりと見始めた。対する一刀も、決して背けたりはしない。

「・・・。」

「・・・。」

しばらく無言の状態が続いたが、それも長くはない。

「・・・ふん・・・なるほどねえ・・・。」

「???」

次真は一刀を値定めるように呟く。

「確かに、鬼吉さんが敗れるのも頷ける。こりゃ並々ならない人物に鍛えられたな・・・。」

「・・・よく、分かるね・・・。」

「まあね。あと、俺はあんたが異世界に行ったことは信じてるよ。」

「ああ、それは爺ちゃんから聞いている。」

「そっか……。」

お互いに言葉は交わすものの、緊張は解いていない。この後戦うかもしれないということを考慮すれば当たり前なのかもしれないが、今のこの二人の間に平気で立てる者が果たしてこの道場にいるだろうか？ それほどまでに、空気は逆立っていた……。

「何の用があつて、俺の所に来たのかな？ 俺は君達の敵だよ。相当失礼なことも言ったしね。」

「そうだね。門下生達は怒ってるよ。俺達があんたを叩きのめすところを見たいらしい。」

「ははは、嫌われてるなあ。」

「自分でそうしたんだろ？」

「言えてる。」

そう言うやいなや、一刀は再び素振りを再開する。次真の方も、来た道を引き返し始めた。が、途中で止まるところ言った。

「あんまり舐めないほうがいいぞ。この世界が甘いからって、ここの人たちが全員墮落してるわけじゃあないからな。」

「（ブンッ！ ブオンッ！）……。」

「あんたは義久兄さんが杉崩しを使う前に仕留める気だろうが、あの人はそんなに簡単じゃないぞ。」

「（ブンッ！ ブオンッ！）……………」

「まあ、せいぜい気をつ「おい。」…何？」

「首洗って、待っとけよ。」

フッ

「それ、こっちの台詞ね。」

共通Side

二時間後・同所

屋外稽古場には道場本館の全門下生と別館の門下生の一部、そして一刀の知り合いと思しき者数人が集まった。斉昭や和那を始めとした門下生の一部は早速一刀知り合いと何かを言い合っている。お

そらくは「どっちが勝つか」なんてことだろうが・・・。

「皆、静まれい。」

大きくはないがはつきりとした当主の声が響く。それだけで、場は先ほどまでとは打って変わって静かになる。

「さて、今日ここに集まってもらったのは他でもない。今まで齧るほどしか剣道をしておらんだった我が孫；一刀じゃが、こやつは昨日の試合で別館の猛者達を次々と圧倒し、拳句には師範代の鬼吉をも破った。」

ザワザワザワザワ

ここに来ている時点でそのことを聞いていることが前提ではあったものの、やはり信じられないというのが皆の心中だ。が、当主の言葉として告げられるのならば違ってくる。改めて確認した事実はざわめきを起すのに十分なものだった。

「これこれ、静まれい。」

当主の声で再び静穏となる。

「わしもその経過を見ていたが、啞然とした。そして、我が孫ならやるではないかと思ってしまうてのう。・・・じゃが、一刀は言いおった。」

そこまで言ったところで、南側より一刀本人が登場した。そして、

『アノ言葉』を堂々と言った。

「俺は、ここの誰にも負けない。いや、負けることは出来ない。」

・・・。。！！！！？

『ふざけるなっ！！！！！！！！！！』

『舐めやがってっ！！！！！！！！！！』

『いい気になるなっ！！！！！！！！！！』

『何様のつもりだっ！！！！！！！！！！』

ギャーギャーと罵声が起こる。しかし、彼は続ける。

「別にふざけてなんかいない。現に、今ここで俺に勝負を挑む勇気もないだろ？ それでいて舐めるなっか……。説得力がないよ。」

シンッ・・・

その言葉だけで、罵声は止んだ。

「俺は自惚れてなんかいない。ただ、事実を言っただけ。この道場・・・・いや、この世界で俺に適う人はいないよ。」

『・・・・・・・・』

一同、絶句といったところであろうか。誰も、何も言い返せない。それだけ、一刀の言葉には何かしらの説得力があったのだった。

「・・・ま、まあそういうことじゃ。こやつはこう思っておる。じやからこそ、今日の試合を組んだわけじゃ。二人とも、こちらへ。」

「はいっ！」

「りょくかい」

北側より、義久と次真が現れた。義久は既に面籠手をつけて臨戦態勢となっていた。が、

「・・・次真、お主はなぜそんな格好をしておるのじゃ？」

「へっ？ うんとね、こっちの方が動きやすいから。」

「いや、じゃがその格好は示しがつかんというか、根本的にOUT
というか

・・・。」

「まあいいじゃん それより続き続き」

「はああああ、勝手にせい……。で、要するにじゃ。一刀はこの道場に自分に勝てるものはおらんと言っておった。じゃから、この道場でも抜きん出て稽古を積んでいる義久と、ずば抜けた実力の次真との試合を組んだのじゃ。といつても、一刀が義久に負けた時点で次真が試合をすることはないんじゃないか……。」

当主は半ばあきれ返った口調で説明を続けた。一刀は無表情に、義久は大真面目に、次真は欠伸をしながらも聞いている。

「まあ説明は以上じゃ。なら早速始めるとするかの。一刀、義久、準備せい。」

「ああ」

「おうっ！」

それぞれが支度にかかる。と、義久は次真の耳元に寄るとなにやら話し始めた。

「どうしたんすか？」

「いやな、なんでお前はその格好なんだと思つてな。」

「義久兄さんの勝利を半ば確信してといたいところだけど、まあ『本気』を出すための準備といったところかな。」

「『本気』の準備？」

「ええ……。相手を『倒す』のではなく、『殺す』ための準備を、ね……。」

「っ！？　おいおい、本当に殺す気じゃないだろうな。洒落にならないぞ！？」

「殺しはしませんよ。ただ、俺が試合をするということは義久兄さんが敗れるということ……。そのくらいの気持ちで行かないと、俺も負けるから……。」

「なるほど。まっ、俺は全力でぶつかるだけだ。期待して観てろ。」

「了解」

そして、義久は既に準備が出来ていた一刀と向かい合う。

「勝負は一本。攻撃に関しての制限は一切設けぬ。ただ、勝負が決した後も攻めを止めぬ場合は即刻失格じゃ。分かったな。」

「ああ（ええ）。」

二人は答えると、竹刀を構えた。一刀は正眼、義久は堂々の大上段だ。

「では……。始めっ！！！」

「やあああ！！！！！」

「おおおう！！！」

それぞれが掛け声で牽制する。互いに構えは変えない。

「どう見る、次真。」

「一刀はまるで隙がないな。それはもう、蟻の子1匹通さないって感じだよ。義久兄さんも同じだ。ただ、義久兄さんは大上段に構えているだけに、先に仕掛けないと不味いかも……。」

「そうね。できれば先に動いときたいとこね……。」

次真の分析に和那も同意する。意見を促した斉昭はうんうんと関心したような頷きを見せている。と、

「せいっ！！（ビュンッ）」

「（ガッ）っ！？」

義久が先手を取った。隙がないとはいえ、打ち込まなければ始まらない。そういうことをよく知っている彼は先に動いたのだ。大上段からの単純ながら強烈な面打ち。一刀はきつちりと防いだが、少し痺れたらしい。そこが付け目と思ったか、義久は同じ面打ちを繰り返す。一刀は防ぐ。が、焦りはみられない。どころか、非常に落ちて着いている。

「ちっ……きえいつ！！！（シュッ）」

「（ヒュッ、スッ）。」

面打ちは難しいと思ったのか、義久は今度は突きを連続で繰り出してきた。その速さは次真や鬼吉でも表情を険しくするほどの鋭さだったが、一刀は防ぐのではなくかわしている。その身のこなしは常人では真似できない部分があった。

「なっ、これもかわすか……。なら、……（スウウウウウ）」

義久は突きを中断し、距離をとって竹刀を八双に構えなおした。

「あの構え……。まさか!？」

「うん、あれは『杉崩し』の準備だな。義久の奴、ここで決めるつもりだ。」

「マ、マジ!!? やったー!! 念願の杉崩しを観れるー」

末男の解説に次真は大喜びだ。それをみた斉昭と和那は苦笑しつつも、自分達も興味津々で義久の動作を見ている。

「この秘技、いかにお前でも破れないぞ……。」

そう言って、八双の構えのまま少しずつ間合いを詰め始めた。……が、

「杉崩し、ね……。くだらない」

「なっ!？」

「そんな技があるなら、さっさと使えばよかったものを。」

「ず、ずいぶんと余裕だが、空元気もいいところだぞ!！」

「ああそれ違うから。てか、そんな技があると知って簡単にさせ
ると思う?。」

「何!？」

「『どんなに恐ろしい技でも、出す前に決めてしまえばいいんだよ。』

」

「なっ!?!?!?!?!?。」

「ふんっ!?!(ブォンッ!?!)」

ドガアアッ!?!?!?!

「あっ!?!?!?!?!」

「おっ!?!?。」

「が、がはっ……。」

ドサッ

次真達は啞然とした。一刀の姿が消えたと思った瞬間、義久の頭に竹刀が恐ろしい威力で振り下ろされていた。義久は突然のことに対応が遅れ、あえなく面打ちを食らった。

「一本!!! そこまでじゃ。勝者、一刀!」

『ガヤガヤガヤガヤ』

『ザワザワザワザワ』

観衆はざわつき始めた。何せ、一刀の圧勝だったからである。彼は面打ちの一撃しか放っていない。それが決定打となり、勝利したのだ。……格の違いを、見せつけるかのごとく。

「義久兄さん!!!」

「塾頭!!!」

「先輩!!!」

次真・斉昭・和那の3人は倒れた義久の元へ駆け寄った。

「うう、負けちまった……。ごめんな、なんか無様だな……。」

「大丈夫なのか！？ 物凄い衝撃だったけど。」

「平気だ、とは言えないな……。ちょっと、眩暈がする……。」

「しばらく安静にしてたほうがいいわよ。」

「ああ、それがいい。」

「すまん……。」

そう言うと、義久はこちらに走ってきた末男の肩を借りつつ、宿舎のほうに引き上げていった。

「……少しは気遣いってもんを見せてもいいんじゃないか？」

次真は先ほどから黙ってこちらを見ていた一刀に対してそう言い放った。

「勝負に情けはいらないよ。」

「思いやりって言い方は出来ないようだな。」

「悪い出来ない。」

「てめえ！！ さっきから言いたいように言いやがって！！！！」

「よせ斉昭！ ここで怒鳴っても何にもならない。」

「ぐっ……。」

怒りの形相で一刀に怒鳴る斉昭を宥めつつ、次真は一刀から視線を外さない。

「『杉崩し』、受ける気は無かったのか？」

「ない。それに、技を出す前に勝って何が悪い？ のろのろしていたあつちが悪いんだ。」

「ちょー！！ そんな言い方はないんじゃないっ！！！！」

「事実だろ？ それに、元々から秘技なんかに頼るからいけないんだ。」

「なっ！？」

「教えてあげるよ。本当の強者はね……、秘技なんかに頼らない。純粋な一撃をもって敵を打ち砕く。それが、『本物』なんだ」

「……。」

和那も言葉を失う。言い返すことが出来ないようだ。 次真を除いては……

「よく分かった。」

「何が？」

「お前の状態がな。」

「どういうこと？」

「ただの押し付けだぞ、それ。」

「なっ！？・・・どういふことが説明してくれ。」

「要するに、それは向こうの世界でのことだってこと。お前があつちでの仲間と共に歩んだなかで学んだつもりなんだろうが、なっちやいない。」

「なんだと・・・（怒）」

「一つ、言っというてやる。」

次真は一刀の目の前に立ち、こう言った

「ここは『お前がこの前までいた世界』じゃない。だから剣に関しても、価値観とかが違う。・・・その違いを無視して、お前の理想を押し付けるな、北郷一刀っ」

冷然と、告げた。しかし、一刀に動じた気配は無い。そして、口を開く。

「なるほど、確かにそうかもな。・・・なら、この世界に用は無いよ。」

「ほう・・・、ならどうするんだ？」

「どんな方法を使っても、『向こう』に帰ってやる。だが・・・、」

「だが？」

「その前に、君を打ち負かすよ、片峠次真。」

「・・・ふん、やれるものならやってみる。・・・後悔するよ。」

次真は竹刀を構えた。が、防具を一切つけていない。これには当主も驚いた。

「これ次真、防具を着けぬか！ 流石に危ないぞ。」

「爺さん、心配しないでくれ。俺は平気だ。・・・むしろ、こっちの方が緊張感があつてやりやすい。それと、先に謝っとく。」

「な、何をじゃ？」

「一刀、叩きのめすから、そこ勘弁してね。」

「！？」

「なっ！？」

「まあ、義久兄さんの敵討ちつてとこで考えといて」

「おい次真、お主本気か！？」

「ああ、マジで本気だよ。」

次真がそういつた瞬間、

ドッ

『なっ！！！！！！！？』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

彼の雰囲気が一変した。そして、とてつもない闘気を彼から感じた。……殺気が混じった恐ろしいほどの闘気を……。

「い、一体……？」

「あれが、次真の、本気……？」

斉昭と和那はそのあまりにも凄まじい闘気に気圧され、動くことが出来ない。

「あやつの本気は物凄いものであることはここに來た当初からわかっていたとはいえ、まさかこれほどとは……。」

「こりゃあ、当主を超えてるかもなあ……。」

「うむ、今のわしよりも遥かに上じゃ。」

「あちゃあ……。なんか試合の約束しちゃったのは不味かったかも……。」

当主と鬼吉は予想を超える闘気にたじろぎ、

「次真……、凄いじゃねえか。」

「ああ、凄すぎる……。」「

宿舎に向かう途中だった義久と末男も思わず立ち止まってその闘気を感じていた。そして、一刀は・・・、

「（ガクガクガク・・・）」

震えていた。

「（ガクガク・・・）（な、何なんだ・・・？・・・春蘭や霞の本気に匹敵するようなこの闘気・・・。）」「

愛しくも、畏怖する少女の名を呼び、震え続ける。

「（こ、怖い……。でも……。!!!!!!）……。はあああ
ああああ!!!!!!!!!!!!」

ゴ
オ
ツ

瞬間、一刀も次真に匹敵するほどの闘気を放出した。

「嘘つ！？」

「マジかよ!？」

「信じられん・・・。」

「もう滅茶苦茶になってきて、訳がわからねえよ……。」

最早、驚くことすらも諦めたという感じになりつつある。

「……驚いた。まさかそんな力があつたとは。」

「それはお互い様。で、始めないの？」

「ふっ、さっきまで震えていた奴が言うことかよ……。ま、それもそうだけどな。爺さん、審判頼むよ。」

「うんっ！？ お、おう分かった。」

北郷一刀と片峠次真……。桁違いの闘気を纏う二人が、今激突する。

「（確かに凄い闘気……。だが、そんなにこの世界も甘くは無い。お前が見落としたもの、その重さを教えてやるよ。）」「

「（俺は誓ったんだ……。負けられない。否、負けない。だから・
・華琳……。もう少し、待っててくれ！！！！）」

「では……。始めっ！！！」

ダッ！

「てりゃああああ！……！！！」

「はああああああ！……！！！」

互いに疾駆し、ぶつかる

(後書き)

肥後魚

「前半終了です。後半は多分10月以降になります。それまでお楽しみ〜！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9153n/>

蒼神の軌跡「第三章の一步手前」：前編

2010年10月8日15時20分発行